様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２９１７

研究課題名（和文）植民地朝鮮社会における朝鮮駐屯日本軍の実態と役割に関する基礎的研究

研究課題名（英文）The basic Analysis of the Role of Japanese Army in Korea during Japanese Colonial Period

研究代表者
庵逧　由香（ANZAKO, YUKA）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：７０４６０７１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：植民地に駐屯していた日本軍、特に朝鮮駐屯日本軍(朝鮮軍)に関する研究は、近年になってようやく始まったばかりである。本研究を通じ、まずはこれまで使用されていなかった諸資料(隷下連隊レベルの各種記録、所属兵士回顧録、オーストラリア軍・オランダ軍など連合国軍作成資料など)を収集・整理・分析し、関連研究会で発表して資料目録の共有を図った。また韓国各地や日本に残る関連史跡のフィールドワークを行った。これらの諸資料を利用し、朝鮮軍研究の基礎情報を提供する論考を刊行した。また海外・国内で開催された国際学会でも朝鮮人志願兵分析などの研究成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
朝鮮植民地支配を支えた暴力機構の一つが、そこに駐屯していた朝鮮駐屯日本軍(朝鮮軍：陸軍第19師団および第20師団)である。しかし、この朝鮮軍についての研究は、まだ緒に就いたばかりである。特に近年でも植民地支配の問題が日韓・日朝関係で政治的課題になっており、植民地におけるこれらの実態を解明することは、今後ますます重要になってくると思われる。

研究成果の概要（英文）：Researches on the Japanese Army stationed in the Colonies, especially the Japanese Army in Korea (so called Korean Army; Chosen Gun) has been started recently. First, I collected and analyzed materials and documents which were not used in former researches, such as various records of regiments, memoirs of belonging soldiers, records of the Allied Forces of the Australian Army, Netherlands Army, etc. I also had some research presentations at research conference and shared a list of these documents. In addition, I did fieldworks of related historical sites which remain in Korea and Japan. I published two papers which provides basic information and analysis on Japanese Army in Korea. Also, I had two research presentations on the analysis of Korean volunteer soldiers at International Conferences held abroad and in Japan.

研究分野：朝鮮近代史

キーワード：植民地兵士　兵力動員　植民地の軍隊　朝鮮軍　志願兵　徴兵

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本軍の朝鮮常駐は、1904 年の日露開戦に伴う韓国駐箚軍司令部の設置により本格化し、1910年から1945年の植民地政策実施時期に二個師団常駐が制度化され、1945年8月の日本敗戦とその後のソ連軍・米軍による武装解除により終焉した。朝鮮を植民地支配するにあたって、植民地統治構造を根底から支えていたのが、これら日本軍の存在であった。朝鮮は日露戦争以後、陸軍の大陸進出の根拠地として重要な位置を占めていたため、朝鮮駐屯日本軍は、安定的な朝鮮植民地支配の維持および対ロシア・対中国をにらんだ日本帝国の国防という二つの目的を同時に有していた。そのため、朝鮮内外の朝鮮民族解放運動を弾圧する一方、関東軍と密接な関係を持ち、満洲事変(1931年)、盧溝橋事件(1937年)などの国境地帯の軍事行動にも積極的に参加した。

このような朝鮮駐屯日本軍(通称朝鮮軍)に関する研究は、初期に日本史の分野で先駆的な研究(芳井研一、藤原彰、由井正臣など)が出されたがそれほど多くはなく、朝鮮史の分野では1938年以降の朝鮮人に対する志願兵・徴兵政策研究(宮田節子、樋口雄一など)の中で部分的に言及されるに留まっていた。しかし2000年代に入って、日本・韓国双方で活発に研究成果が出されはじめた。研究内容も、朝鮮軍の編制や動向、性格といった概説的なもの(辛珠栢、徐民教、宮本正明、チョ・ウォンギなど)から、日本陸軍の朝鮮統治政策や思想、朝鮮軍司令官・参謀長の朝鮮認識などを具体的に分析した研究(朴廷鎬、松田利彦)、また最近では朝鮮軍司令部の特定部署とその政策に焦点をしぼった研究(金相奎、曺健)など、多様化してきている。しかし、このように少しずつ研究が増え始めているものの、朝鮮軍の実態がどのようなものだったのかについては、まだ明らかにされていない点も少なくない。特にこれまでの研究のほとんどが、陸軍中央や朝鮮軍司令部を中心とする朝鮮軍の作戦行動や、朝鮮人徴兵といった一部の政策のみを対象としており、朝鮮軍を構成する核である各連隊や、所属していた一般兵士に関する研究は、まだ手をつけられていない状況であると言っても過言ではない。

２．研究の目的

本研究は、植民地朝鮮に駐屯していた朝鮮駐屯日本軍(通称朝鮮軍)の実態を各連隊レベルで分析することで、朝鮮軍が朝鮮社会とどのように関わり、どのような影響を及ぼしていたのかを明らかにすることを目的とする。朝鮮軍に関する従来の研究は、陸軍中央や朝鮮軍司令部による作戦行動や、徴兵など一部の政策のみを対象としており、朝鮮軍を構成する核である各連隊や一般兵士の認識に関しての分析は、これまでほとんど行われてこなかった。本申請では、(1)各連隊の基本構造と徴集システム、(2)所属兵士たちの植民地朝鮮認識、(3)朝鮮人の朝鮮軍認識という３つの課題に焦点をしぼり、戦後まとめられた各連隊の概要史や所属兵士の回顧録、文学作品の中の朝鮮軍記述など、これまであまり使われていなかった資料を通じて分析を行っていく。

３．研究の方法

(1)「各連隊の基本構造と徴集システム」の課題については、朝鮮軍(第19師団・第20師団)の隷下の各連隊は、８つの歩兵連隊、２つの騎兵連隊、２つの野砲兵連隊の計12の連隊を基幹としており、これらすべての連隊を同じ比重で分析するには時間的に難しいが、歩兵連隊を中心に、課題の分析を試みる。具体的に①各連隊の概要史整理、②連隊内編成のしくみと基本構造、③連隊ごとの徴集地域からの徴集方法といったテーマから分析を試みる。(2)所属兵士たちの植民地朝鮮認識については、所属兵士たちは、日本各地から徴集された日本人兵士および、陸軍・海軍特別志願兵制度で徴集された朝鮮人兵士であったが、彼らの軍隊生活がどのようなものであったのか、また軍隊生活を通じて彼らが植民地朝鮮をどのように認識し、どのように考えていたのかに焦点をあてて分析を試みる。各連隊史や連隊資料もさることながら、連隊所属の兵士たちによる手記や回顧録を精読し、そこから読み取れる彼らの朝鮮認識について分析する。(3)「朝鮮人の朝鮮軍認識」の課題については、①1938年の朝鮮人志願兵制度・1944年から実施の朝鮮人に対する徴兵制度により連隊に入隊した朝鮮人の証言や記録、②朝鮮人作家による朝鮮軍に関する作品(小説、随筆、回顧など)、の二つの資料を通じて分析を試みる。

４．研究成果

（1）資料収集：朝鮮軍隷下基幹連隊である歩兵第 73 連隊～歩兵第 86 連隊までの 10 個連隊について、①各連隊が戦後に編纂・出版した概要史や記念写真、②所属兵士の回顧録、③朝鮮軍所属兵士に関わるその他資料、の調査を行い、資料目録を作成した。これを土台に、靖国偕行文庫や国会図書館、奈良県立図書館を中心に収集作業を行い、各種名簿 39 点、連隊史資料 47 点以上、および朝鮮関連部隊所属兵士の回顧録 25 点以上を入手し、データ化した。また、③に関しては沖縄やオーストラリア戦争記念館、オランダ公文書館(ハーグ)で資料調査を行い、オーストラリア軍やオランダ軍が朝鮮軍隷下連隊から押収した資料や、同連隊所属の捕虜訊問記録なども調査・収集することができた。

（2）フィールドワーク：朝鮮軍施設に関わる遺跡や朝鮮人兵士に関わり、以下の場所でフィールドワークを行った。沖縄、台湾(台北、高雄、台南、屏東)、韓国(鎮海、富坪、巨済島、済州島)、サイパン、テニアンなど。主に旧日本軍施設・建物の残存を調査し、当時の基地の位置や規模確認など、文献資料の内容確認を中心に行った。

（3）以上のような資料収集と分析、フィールドワークなどから得た知見から、朝鮮軍隷下連隊について、以下の特徴を整理した。①一般的に師団に比べて連隊は徴集地域が同一のため地域性、

連帯意識が強く、所属意識も高い。しかし朝鮮軍の場合、日本全国各地から少しずつ徴集されており、また徴兵期間終了後にはほとんどが本国(日本)に戻るため、通常の連帯意識は相対的に低い。②朝鮮は中国・ソ連と国境を接しているため、植民地下では比較的早い段階で二個師団の設置が決まり、数年間かけて二個師団の配備が行われたが、主に国境地帯への配備が大多数を占める。③朝鮮軍配下の将兵は、朝鮮人に対する兵力動員(志願兵・徴兵など)が開始されるまで、一部の例外的朝鮮人将兵をのぞき、主に日本で徴集された日本人の現役兵で構成されていた。④朝鮮軍の朝鮮人認識は、1930年代に入ると大きな関心の対象となり、「思想研究委員」などの組織を設置し、研究対象としていた。⑤朝鮮における総動員体制構築準備を背景に、1937年の日中戦争全面化を契機に、1938年には陸軍特別志願兵制度が、1944年から徴兵制の朝鮮人適用がはじまり、朝鮮人の本格的な兵力動員が開始する。この時に動員された朝鮮人兵士のほとんどは朝鮮軍に配置された。⑥一方、戦時下になると、19師団はフィリピンに、20師団は中国北部への出動から帰国後、さらにニューギニア地域に動員された。フィリピン、ニューギニアともに死亡率が非常に高く、戦後刊行された連隊史のほとんどは、戦時経験に関わる内容が大部分を占めている。⑦こうした戦場を経験した朝鮮人は主に陸軍志願兵として徴集された朝鮮人である。経験者の口述記録や回顧録を尋問記録や死亡診断書、留守名簿などの資料と付き合わせてみると、非常に複雑な朝鮮人兵士(おもに志願兵ら)の様相が浮かび上がってくる。なお、詳細な分析は、研究会報告や学会報告、書籍収録論文などで公表している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①庵逧由香「東アジア共同運営高等教育プログラム構築の試み　―立命館大学文学部キャンパスアジア・プログラムの事例―」『立命館高等教育研究』、査読あり、第 18 号、2018 年、43-58 項。

②庵逧由香「『慰安婦』問題日韓『合意』をどのように考えるのか」『コリア研究』、査読なし、第 8 号、2017 年、13-20 頁。

〔学会発表〕（計 9 件）

①ANZAKO,Yuka, Forced Mobilization to the Battlefields -Korean soldiers' experience during Asia-Pacific War, International Conference on Colonial Mobilization in Africa and Asia during the Second Wolrd War: Soldiers, Labourers and Women, 2018.

②ANZAKO, Yuka, The Japan-Korea History Problem: Causes and Structures of Conflicts Over the Colonial Past, Special Lecture at Leiden University, 2018.

③庵逧由香「北韓『慰安所』関連資料―遺物・証言の文献的検証を中心に」国際シンポジウム「日本軍『慰安婦』資料発掘の現在と今後の課題」、2018 年。

④庵逧由香「朝鮮軍(朝鮮駐屯日本軍)研究の成果と課題」「第二次世界大戦期植民地兵の研究」定例研究会、2017 年。

⑤庵逧由香「資料紹介　朝鮮軍隷下連隊資料-第 20 師団隷下連隊に関するオーストラリア戦争記念館所蔵資料」「戦時期砲戦社会の諸相」研究会、2016 年。

⑥庵逧由香「咸鏡北道芳津の『植民地慰安所』」韓国史学会 2016 年度大会、2016 年。

⑦庵逧由香「日本の高等教育機関における韓国学教育の現状と展望　-『K-pop 世代』の登場による変化を中心に」第 1 回世界韓国学ビエンナーレ、2016 年。

⑧庵逧由香「資料紹介：朝鮮軍隷下連隊資料　―第 20 師団隷下連隊に関するオーストラリア戦争記念館所蔵資料―」第 37 回「戦時期朝鮮社会の諸相」研究会、2016 年。

⑨ANZAKO,Yuka, The Structure of 'Total mobilization system' in Colonized Korea during Sino-Japanese War, The Asia-Pacific War, 1931-1945 An International Conference, 2015.

〔図書〕（計 2 件）

①許粋烈著、庵逧由香訳『植民地初期の朝鮮農業　植民地近代化論の農業開発論を検証する』明石書店、2016 年、352 頁。

②坂本悠一、近藤正己、庵逧由香ほか編著『地域のなかの軍隊　7 巻　植民地　帝国支配の最前線』吉川弘文館、2015 年、248(186-213)頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。